

# 非常放送文の文構成と理解のしやすさについての検討

(指導教員 世木 秀明 准教授)

世木研究室 0731027 大村 卓也

## 1 はじめに

地方自治体や企業などで定められている非常放送文の内容は、地震や火災などの災害の発生状況や、注意すべき情報などを組み構成されている。しかし、これらの非常放送文の文章数、モーラ数、情報数などは多種多様である。また、その非常放送文の内容がどの程度伝わるのかは明らかではない。

そこで本研究では、地方自治体で定められている非常放送文を基にして、文章数と1文に含まれる情報数を変化させた非常放送文を作成し、聴取実験により、どのような文構成の非常放送文が理解しやすいのかについての基礎的検討を目的とした。

## 2 聴取実験

### 2.1 実験用刺激

刺激材料として、災害の発生を伝える文章の後に、注意すべき事柄などの情報を1文に1個含んだ複数の文章で構成される「複数文で構成される非常放送文」と災害の発生を伝える文章の後に、注意すべき事柄などの複数の情報を1文に含む「1文で構成される非常放送文」を合計 85 文章作成した。ここで、複数文で構成される非常放送文の文章数は1、2、4、8文、1文で構成される非常放送文に含まれる情報数は2、4、8個とした。

聴取実験には、刺激材料を音声合成ソフト VoiceText の女性音声で読み上げたものを実験用刺激とした。以下に実験で使用した刺激の一例を示す。

[複数文刺激、情報数 2 個]

地震が発生しました。  
火の始末をしてください。  
テレビ・ラジオの情報に注意してください。

[1 文刺激、情報数 2 個]

地震が発生しました。  
火の始末をし、  
テレビ・ラジオの情報に注意してください。

### 2.2 実験方法

聴取実験は、実験用刺激を用いた聴取実験 1 と聴取実験 1 で正答率が低く情報数が 4、8 個の非常放送文を「繰り返しお知らせいたします」という案内と共に同じ文章をもう一度繰り返した実験用刺激による聴取実験 2 を行った。両実験とも静かな部屋で行い、被験者前方 150cm に設置したスピーカより、実験用刺激を至適レベルで提示した。被験者は、実験用刺激の聴取後「何が起きたのか」、「放送に従ってすること、注意することは何か」という設問に筆記で解答させた。被験者は、健康な聴力を持つ 20 代男女 29 名(実験 1:18 名、実験 2:11 名)とした。

## 3 実験結果と考察

聴取実験 1 の結果を図 1 に、聴取実験 2 の結果を図 2 に示す。

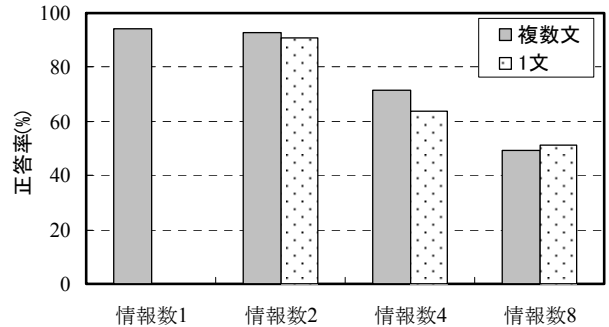


図 1 聴取実験 1 の結果

図 1 に示す実験結果より、複数文で構成されている文章、1 文で構成されている文章共に情報数が増えるに従い正答率が有意に低下し、情報数が 8 個になると正答率は 50%程度まで低下した。また、複数文と 1 文で構成された非常放送文の正答率を比較すると、有意な差はないものの複数文で構成された非常放送文の正答率が高くなる傾向が見られた。さらに、情報数 4 個と 8 個の非常放送文で最初から何番目の情報が最も良く再生されるかを調べたところ初頭効果と親近性効果が複数文で構成される非常放送文、1 文で構成される非常放送文共に認められた。

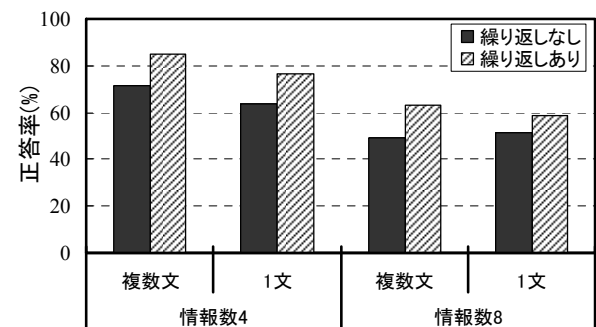


図 2 繰り返し放送した場合の正答率

図 2 に示す聴取実験 2 の結果から、繰り返すことですべての条件において正答率の上昇が見られた。さらに、複数文で構成されている非常放送文では繰り返すことで、1 文で構成された非常放送文に比べ正答率が有意に高くなることがわかった。

## 4 まとめ

聴取実験結果から、一つの文章内に含まれる情報数はなるべく少なくして、繰り返し放送することが理解しやすい非常放送文となるのではないかと考えられた。